外国語コースに関する素朴な質問

編　集　部

藤本黎時教授に聞く

今年度入学の61生から選択可能となる外国語コースは、多くの学生から注目を集めているのではないだろうか。従来の文学部、外語大等の外国語教育を超えた学際的なそれを目指して、開設される予定である。概略については、飛翔№30及び無限への挑戦に掲載されていて、もう御存じのことと思う。そこで、もう少し具体的な内容を求めて情報収集に回った。

Q　定員10名とは、ずいぶん少ないようですが、どうしてなのですか。

A　今までの総合科学部に新しいコースを設けるわけですから、いきなり定員を大人数にするわけにもいきませんし、学生一人一人の要望に応えるためには、10名程度が適当な人数なのです。また、他のコースを見ても、地域文化、環境科学が50名、社会文化、情報行動が30名の定員であり、さらに各コースがいくつかの群に分かれていますから、実際のところ、そう人数は変わらないのです。

Q　ということは、希望者が多かった場合は、結局、成績順に上位10名しか外国語コースに進めないというわけですね。

A　そのとおりです。外国語コースの希望者は、そんなに多いのですか。こちらとしては、嬉しいですねえ。皆さん、どんどんいらっしゃい。

Q　そうおっしゃられても……、やはり一年の時からかなり勉強していなければならないのでしょう。

A　もちろんです。外国語コースはハードですからねえ、高度な語学力が必要です。仏語、独語を実用にまでもっていけるかどうかも、あなた方の努力次第ですよ。

Q　なるほど、ところで外国語コースに開講予定の講義（授業）内容についてお聞きしたいと思いますが。

A　それならこの表を見て下さい。これで概略は、おわかりだと思います。（以下右表参照）

Q　右に上げた他、読む、書く、聞く、話すの四技能の訓練は当然行われるわけですから、相当高レベルで、ハードな内容になりますね。

A　ええ、今度新たにコンピューターを導入したり、同時通訳の専門家をお招きしたりして、たいへん実用的な語学を学べるようになっています。

Q　そうですか。語学といいますと、留学を考える人も多いかと思いますが、その辺りの制度は整っていますか。

A　留学に関しましては、他学部と同様に留学試験を受けていただかなければなりません。試験に合格してから各々希望の国へ留学するようになっています。ただ、試験の際に、語学に強い外国語コースの人が有利だということは、言えますね。

Q　しかし、外国語コースだから有利だというのではなく、有利にならなければ意味がありませんね。それでは、外国語コースに進むには、どんな人が向いているのでしょうか。

A　外国語コースの卒業生に開かれている進路は多岐に渡っています。語学はもちろんのこと、他の分野にも深い知識が必要です。ですから、とにかく限定はしませんし、あらゆる分野に興味を持った人を誰でも受け入れます。

Q　意欲的で、勉強熱心な人ならば、誰でも向いているということでしょうか。チャンスは誰にでもあるわけです。今外国語コースに興味を持っている人も、そうでない人も、どんどん挑戦して欲しいものですね。今日は本当にどうもありがとうございました。

以上少しは参考になっただろうか。私の感想としては、たんへん恵まれた条件で外国語を学べる機会を是非逃さないようにしてもらいたいということだ。

（文責　内藤千恵美）

＜外国語コースの講義内容＞

授業課目	概　　要
現代言語理論	構造主義的言語学から、変形生成理論に至る現代言語理論及び、言語と近隣諸科学との関係について概説する。
音　声　学	言語伝達の際の言語音の調音法について、ファイバースコープオシログラフによる実験や、生理学的研究成果を参考に概説する。
言語発達史	古代から現代に至る言語（英仏独中露）の発達の歴史を文法、音韻、語義等の面から概説する。
社会、人類言語学	社会の中での言語の多様な表われ、機能的分化について、また人類社会にとって言葉の果たす諸相について概説する。
言語応用論	言語を学習、教授する際の基盤となる諸要因、問題点を心理学、言語学、大脳生理学、神経言語学等関連諸科学やコンピューター、L.L.等の機械を応用しての言語行為の解明について概説する。
言語思想論	言語の表現形態（記号、象徴、隠喩等）及び形而上学認識論、論理学、存在論等における言語の関わりを考察する。
言語文化論	民族学、歴史学、哲学、文学等広範な人間の文化的活動と、言語の関係を学際的に考察する。
言語芸術論	詩、小説、劇、批評等を研究の対象とし、豊かな情感表現の具としての文学的言語について考察する。

授業課目	概　　要
異文化コミュニケーション論	社会的に、また文化的に異なる状況のもとでの、言語媒体を通しての伝達の諸問題について考察する。
総合言語論 総合言語文化論	将来の研究領域を定める上で、参考にするための基礎的講義。それぞれ専門領域を異にする5人の担当者が、一期3回（6時間）ずつ担当する。

Give me your tired, your poor,
Your huddled masses yearning to breathe free,
The wretched refuse of your teeming shore,
Send these, the homeless, tempest-tossed, to me:
I lift my lamp beside the golden door.

新任紹介　その1

Festina lente

今里（いまざと）　智晃（ちあき）

昨年の十月一日付で総合科学部に着任致しました。生まれも育ちも東京ですから（父の転勤で途中4年間は横浜暮しを経験しましたが）、広島はまったくの未知の土地。親戚も知人もいないし初めは些（いささ）か不安を感じましたが、諸先生や事務の方がたからいろいろ親切に教えて頂いたお蔭で、何とか新しい生活のスタートが切れたというところです。

小生の専門は英語学（英語史）です。英語という言語は大陸のゲルマン語から独立してイギリスの地で新しい歴史の幕を切って落し、さまざまな他言語と接触することで成長と衰退の両方を経験しながら、結果として今日のような国際語としての地位を獲得するに至ったわけです。その変遷の過程を考察するのが英語史です。その際内面史はもちろんですが、外面史にも興味を抱いております。

ここ数年間は英語の音韻史、なかでも母音の史的発展について取り組んできました。すでに H.Sweet, A.J.Ellis, K.Luick, O.Jespersen, R.E.Zachrisson, H.C.Wyld, H.Kökeritz, W.Horn, E.J.Dobson といった学者たちが優れた業績を残しております。小生はこのなかでほとんど言及されることのなかった W.Horn の言語観を座標軸にして、近代英語の変遷を眺め直すことを当面の課題にしています。

また、各時代のイギリス人が自分たちの国語をどう考えどう感じてきたかという問題にも関心があります。これは国語観の歴史、あるいは国語意識史としてとらえられるでしょう。序にいえば、英文学史の最古の叙事詩『ベオウルフ』は、いったいどのあたりの時期からどのような経緯でイギリス人に意識され始めたか。こういう問題も取り組んでみたいと愚考している次第です。

総合科学部ではいよいよ外国語コースができたということで、ますます勉強しなければなりません。Festina lente（ゆっくり急げ）をモットーに、この冊子の標題の如く“飛翔”したいと思っております。最後に、広島についての第一印象を記しておきます。

○ 魚が新鮮で美味しくてニッコリ。
○ 自動車の運転が乱暴でドッキリ。
○ 新聞（全国紙）の夕刊がないのでビックリ
○ 広大のキャンパスが汚ないのでガックリ。

（外国語コース　英語）

郭（かく）　春貴（はるき）

八年前に、新聞記者とアナウンサーの仕事をやめて、日本のマスコミを勉強するために、留学しに参りました。当初は三年の予定でした。それがいつの間にか妻子を持ち、日本に永住することになろうとは、その時は考えもしませんでした。

劇団の活動とアナウンサーの仕事の関係で、大学時代から外国人に中国語を教えはじめました。日本に来てからも、生活の資を得るため、その仕事をつづけました。お蔭で他の留学生より恵まれたアルバイトができたと思います。そのアルバイトをやっているうちに、中国語を教えることを通して、中国語学を研究することが、自分の天職ではないかと思うようになりました。上智大学で新聞学の修士課程を終えてから、思い切って東京大学の中国語専門課程の修士課程を受けました。その後は研究しながら、外務省研修所、日中学院などで中国語の講師をやって来ました。

現在の仕事につくまでに、劇団の活動、新聞記者、アナウンサー、新聞学の研究といろいろやって参りましたが、その経験は決して無駄ではありませんでした。いいえ、無駄どころか、大変役に立っています。

今の願いは、日本に中国の文化を紹介し、中国語の人材を育て、日本と中国、日本と東南アジアの交流を広げることができればということです。この使命は神が与えてくれたのではないかと深く感じています。

お酒の楽しみはあまりよくわかりませんが、スポーツなら、なんでも興味を持ちます。また、芝居と音楽の鑑賞も大好きです。いま、二人の娘と遊ぶのも最高のレジャーです。

どうぞ、よろしくお願い致します。

（外国語コース　中国語）

書いてみなくちゃ、わからない!?

卒論の話

―― 地域・社文編

編　集　部

今、手元に十数枚のコピーがある。過去9年分の「特別研究論文題目紹介」である。（これは毎年『飛翔』春の号の数ページを割いて、コース、氏名、論文題目を掲載しているものである。）総合科学部が創設されて12年。来春には第10期めの卒業生が誕生する予定だ。これまでに書かれた特別研究論文（いわゆる“卒論”）の数は1025本。その1つ1つは語り尽くせぬドラマが……とまでは言わないが、一介の2年生には図り知れないそれなりの「何か」があるに違いない（たぶんあるのだろう、きっと。ある、ということにしておこう。）コース再編成という1つの転機を前に、卒論から総科を眺めてみると ――

卒論って、何？

「卒論」。正式には「特別研究論文」という。学生便覧を見てみよう。まず学部細則15条。「論文試験は、所定の科目試験に合格見込みの本学部の学生に対し、卒業を予定される学期に行う。」以下4項が挙げられている。これに伴って、特別研究に関する内規があって、さらに細かい規定が続く。「特別研究は論文試験により認定する。論文試験は、論文審査及び口述試験又は発表会により行う。」「特別研究は、いずれかのコースに属し、2年を経過した後に受講することができる。」「論文は、所定の用紙を添えて、地域文化コースは1月20日、社会文化・情報行動科学・環境科学コースは1月31日までに学務第一係へ提出しなければならない。」などなど。そして、「特別研究受講基準」などというのもあって、地域文化は136単位の約70%、社会文化は104単位が一応の基準であり、情報行動科学は、108単位、環境科学も104単位の修得が必要である、としている。特別研究科目は、全コース共通の必修専門教育科目で、単位数は6。書きさえすれば卒業できる、というわけではないが、とにかく書かなければ絶対卒業させてもらえないというシロモノなのである。

さて、この卒論、受講基準が各コースで違うのは今述べた通りだが、卒論に辿り着くまでの過程というのもまた様々らしい。今回は、地域文化コースと社会文化コースの2つをわかる範囲で取り上げることにする。

地域文化コースの場合

ご存じの通り、地域文化コースではコース選択後、2年次に所属する群も決定する。ただ、この群の変更は比較的容易らしく、割と頻繁に行われるようである。

日本研究・アジア研究・ヨーロッパ研究・英米研究・比較文化研究の5つの群に分かれた学生達は、選択必修科目Ⅰ～Ⅴ群の中からそれぞれ講義12単位と演習14単位を選択し、履修しなければならない。演習は2年次からの受講が可能で、同じ「演習」でも社会文化コースの「ゼミ」とは事情が違う。2、3年次にこのようにして複数の演習を取り、4年次の春、履修した演習の担当教官のうちのどなたかを指導教官として卒論にとりかかる、というのが地域文化コースにおける卒論への一般的な道筋らしい。

では、その卒論のテーマはどのように決まってゆくのだろう。これは、突き詰めれば「個人個人で違う」ということになってしまうのだが、そこを敢えて考えてみよう。地域文化コースの場合、所属する群が2年次に決まる。そのこと自体がかなりの影響力を持ってくる。変更が容易とはいえ、一応2年生の早い時期に「どの地域をやろうか」位の考えは持つことになるからだ。そして演習を受けながら（決してそれだけには限らないが）だんだんと分野、時代等々自分の興味、関心の対象を絞り込んでゆくのである。言うまでもなく、これには個人差があり、何年次のいつ頃までには何々が決まっていなければならない、というものではない。ただ、卒論のテーマ設定というのは、やはり遅いよりは早い方がいいわけで、卒論（というよりは、自分が大学で何を研究するのか）について考える“きっかけ”としては、悪くないというところか。

社会文化のコースの場合

社会文化コースの学生は地域文化と違って、3年次になると「ゼミ」に所属する。ゼミから卒論までは1本道になると言ってもよいだろう。学生便覧の社会文化コースの要望事項には以下のような記述がある。「社会文化コースの選択必修科目群の中の演習（選択必修2単位以上）は、少なくともその1つを3年次において履修することを要望する。」「4年次に行われる社会文化コースの『特別研究』（必修6単位）は、3年次において各自が履修した選択必修としての演習を実質的に延長させる形で履修することを原則とする。」つまり社会文化の学生にとって、ゼミが決まるということは、卒論の方向を決定づけ、指導教官も自動的に決まることを意味しているのだ。このように社会文化コースにおいては、「ゼミ」が非常に重大な意味を持っていることになる。授業時間割を見るまでもなく、社会文化コースでは2年次に受講できる専門科目がとても多い。これは、ゼミ選択の為の準備として配慮がなされているわけである。ゼミが決まった後は、地域文化の学生と同様、それ以前よりもより高次なものへと自分の問題意識を研(みが)いていくことになる。

「総科らしさ」

以上のような経緯で地域文化・社会文化コースの学生は卒論に臨むのであるが、他学部と較べてみると「総科」としての特徴が見えてこないこともない。

経済学部や法学部には基本的に卒論がないようである。（ただ断っておくが、これはあくまで広島大学の話であって他の大学の話は知らない。）その理由までここでは触れないが、書く場合も出来上がる卒論というのは総科のそれとは違っているらしい。外国の文献を訳すだけ、というのもあるようだ。文学部などでは、段階をおって卒論にとりかかるようだが、総科よりも領域が専門化し深いため、どの教官につくかによって大体のところ迄決まってしまうというのが現実らしい。

卒論というものは、その学問の方法によって大きく違ってくるものであろうし、背景の違うものを並べて出来不出来を云々するのは無意味である。ただ総科の卒論を考えた場合、総科であるからこそ起こる、といってもよい問題は少なくない。卒論指導を行う教官にとって、夏休みが有効に使えないことは、どこに行ったって不満の種である。（特に文科系の学生は就職活動に忙しい。）しかし、興味の幅が広がり過ぎていつまでたっても卒論のテーマが絞りきれないとか、4年間自分なりに学んできたことを直接卒論にある成果として反映させるのが困難だとかいうのは、総科であるが故に生じる悩みであると言えよう。

とりあえず……

卒論について、とりとめもない話をしてきた。何せ書いたことがないのでわからない、としかいいようがない。正直なところである。（もっとも、書いたってわからない、という説もあるが）そんな中で1つだけ実感を伴う“問い”がある。浮かび上がっては消え、隠れてはすぐまた現れる、何度も何度も繰り返される“問い”。

「迷う猶予が与えられているというのは、はたして良いことなのだろうか。」

総科生は、いつも選択を迫られる。
最初に「総科」、次に「コース」、それから「コース内」、そして「卒論のテーマ」と。

次回は、情報行動科学コースと環境科学コースを中心にもっと別の「総科の卒論」を見てみたいと思っています。どうなることやら。

今回の原稿を書くにあたって、ずんぶんいろいろな方にご協力を頂きました。それこそ「卒論のソの字も知らない」私にお話を聞かせて下さった先生方、上級生の方々に最後になりましたが心から御礼申し上げます。

（文責　藤本貴子）

新任紹介　その2

加藤（かとう）　久男（ひさお）

私は昨年10月に筑波大学よりこちらの総合科学部に移ってまいりました。関東地方の海なし県（群馬県）で育った私にとって広島はいろんな点で対照的で、とても興味のわく所です。穏やかな瀬戸内海と山々の織りなす風景は美しく、何よりも魚貝類のおいしさは格別です。そういうわけで昨年よりいくつかの地を訪れましたが、まだ是非とも行きたい所がたくさんあり今から楽しみにしています。こう書くと遊んでばかりいるようなので一応私の専門の話もしてみたいと思います。私の専門は数学の位相幾何学という分野で、特にn次元ユークリッド空間内の図形を主な研究対象としています。1口に図形といってもいろいろで、時には私達の常識をはるかに越えた図形に出くわし面食らったり感動したりしています。それはまさに神秘的でさえあります。例えば鉛筆を置いたきり一歩も動かせないような連結な図形が平面的にさえ存在するのです。なにしろただ1つの線分も含まないのですから。そんなのはもはや図形ではないという反発も聞こえてきそうですが、円周率πを数として認める人はそんなものも図形として認めねばなりません。こんな事を年中やっていますと、私達人間の“常識”が何といいかげんなものだったかとつくづく考えさせられます。私達の周りにもこうだと思い込んでいる事で実は全然そうではない事がたくさんあります。私が研究を通して感じている事ですが、大切なのは今までの知識に振り回されず自らの頭で元に戻って自分なりに考えて判断していくことだと思います。この方法は一般に非能率で利もなく、大変そうですが、実はなかなか楽しいことなのです。大抵の場合はうまくはいきませんが、たまにうまく行くことがあります。そんな時は嬉しくてたまらず思わず、ガッツポーズが出てしまいます。勉学においてもそういう意味での心の余裕が必要だと思います。少し余白があるので、次の問題を考えてみて下さい。平面内の連結な図形で homegeneous（つまり任意の点を他の任意の点に移して全体を重ね合わせられる。正確には連続1対1上への写像がある）なものは、円周と直線以外に存在するか。答えはNOですが、そんな例は現在までたった1つしか知られていません。

（環境科学コース　基礎科学研究）

要田（かなめだ）　圭治（けいじ）

編集部から何か、できたら授業について感想を書け、という依頼がありましたが、着任後間もない私としては、ここ数ヶ月の僅かな経験を前任校でのそれと比較することしかありません。前任校は外国語学部のみの単科大学で、外国語担当教員のほとんどは専門科目だけを教え、その下では（外国語に関してはある程度以上の力を持った）学生がその力に磨きをかけることに余念がありませんでした。いってみれば、教員と学生が暗黙のうちに了解し合う、共通の基盤がかなり大きかったわけです。このこと自体は双方にとってはなはだ結構なことだったに違いありません。けれども ── これは単に技術的な問題なのかもしれませんが ── 単位数の少ない専門科目で四年間の時間割の大半が埋められていることについては不満が無いわけではありませんでした。さらには、このことと相まって、単科大学に特有な、学生の興味と素質の均質性が過度な専門化という悪弊を生じていたことは否めません。

翻って総合科学部に眼を転ずると、その名称自体は漠としたところがあるものの、なにか壮大な実験の場に立ち会っているという感慨がわかないでもありません。着任早々の頃、ある教室でたまたま居合わせた本学部の学生に、何故ここを選んだのかと尋ねたところ、「いささか正体不明でも、なにか面白いことがやれそうだったから」と答えてくれました。脱領域化の時代そのままの自由な発想に、新鮮な驚きを感じたものです。教壇に立つ側からすると、英語の授業一つを取り上げてみても、様々な学部の学生諸君を相手にしていることが、そのままある種の刺激になっています。テキストはできるだけ、私と学生双方の専門分野の境界領域を扱ったものを選んでいるつもりですが、両者の関心の隔たりはいまだ大きく、こちらが既知の概念として固定しかけているものを、再び言葉にして、わかり易く説明し直さなければなりません。このめんどうな作業が何か新しいものを発見させてくれることも多いものですから、今は手探りしつつも授業を楽しんでいるということになるのかもしれません。

（外国語コース　英語）

学内交通規制

黄 色 の 柵

編　集　部

今年の四月、新学年として大学にやってきた時、“おや？”と思われた方も多いのではないだろうか。総合科学部の建物に入る通路の至る所に黄色い防護用の柵が出現していたのである。あらかじめ掲示で通達があったにもかかわらず、普段から不精で、掲示など目を通していない学生は、“何だこれ？”と驚いたはずである。自動二輪、スクーターはもちろん入ることができないし、自転車で通る時でさえかなりの支障があった。“じゃまだな”と思いながらも研究実験のためなどという言葉の前に、“しかたない”と慣れつつあるこの黄色の（多少はげかかっているが）柵を取り上げてみたいと思う。

第一に、これは総合科学部独自のものである。という点をことわっておく。他学部との連携による、全学的な措置ではなく、総合科学部だけ、内部からバイクをしめ出すための手段だということである。ではいったい何処からこの柵が出現したのであろうか。

この2～3年、学内に乗り入れるオートバイ、スクーターの数は急増してきた。当然学内の静寂は破られ、正常な授業運営に支障をきたすこととなった。特に、微生物等の実験を必要とする部所や、語学のヒアリングの授業などでは、騒音や震動が迷惑になるということは容易に想像いただけると思う。大学側も、構内エンジン停止という手段で対策を立てたのであるが、（正門から入る時に笛を吹かれた人も多いであろう。）北門から入るバイクや、体育館沿いに走るバイクは多かった。実際問題として、いちいち北門から押して歩こうなどという気は誰もしない。大学側の対策は有名無実のものとなったのである。そこで、一般教育学生を多く抱え、出入りの激しい総合科学部が決定したのが、例の黄色い防護柵なのである。教授会の決定、要請を経てこの四月に設置されたのであるが、建物の内側に関しては、相当な効果が上がっているようである。

こうして、黄色の柵は、総合科学部の建物の内側から、オートバイをしめ出すことに成功し、あの始動音や、空ぶかしの音などは消えた。そういう点で黄色い柵は役割を果たしたといえる。しかし、同時に新たな問題を投げかけているのである。

まず、学生たちに身近な問題としては、自転車が通りにくいということである。つまり、あの柵は狭くて、高いのである。確かにスクーターの入れない限界まで広くしてあるということだが、不便なのである。狭いということは、防災上の問題ともからんでくるのではないか。消防当局の許可はとってあり、緊急車輌も入れるように、可動性にしてある、というが、パニックとなった時の避難など一抹の不安が残る。また、最初にこの措置は総合科学部独自のものであると述べたが、他学部、特に理学部との兼ね合いが問題となっている。総合科学部からしめ出された、オートバイ・スクーターは現在、理学部前に並べて駐輪するのが多いが、あまりの数のため、消火栓や、緊急車輌入口までふさいでしまっているのである。本質的には、学生の良心や道徳心の問題なのであるが、実際、駐輪する場所が少ないのも大きいといえる。これは非常時にはたいへんなこととなり得るので、早期解決が必要ではないか。

最後に私が一番大きく問題にしたいのが、防護柵に対する不満が一般学生に多いと思われるのだが、それを表明する場が少ないか、ほとんどないと言って良いのではないかということである。今回防護柵の設置決定に関しても、学生の意見は聞かれていないし、設置後も何の反対意見も提出されていない。確かに、今回の防護柵設置に至る過程をながめてみると、学生側に一方的に非があると思われるし、学部の措置も適切であり、やむを得ないといえる。しかし、決定だからどうしようもない、として無批判に受け入れてしまうのは不安なことではないだろうか。

（文責　小笠原弘明）

次に、学生の方にお願いして学内交通規制に対する御意見を書いていただいた。

広島大学十年生

鳴　戸　謙　祥

総科玄関近くに白いパルサーを止め、車椅子で走駆しているひねた新入生を御存知でしょうか。それが僕です。理学部に八年、総科に一年、そして今年医学部に再入学という身の上ですから、千田キャンパスにはほぼ十年の長居になります。外界へ出られなくなった頭でっかちの山椒魚といったところでしょうか。この十年間に気付いたことの中から、今回のテーマに即していくつか述べてみたいと思います。

夏休みに自動車免許を取得された方は多いだろうと思います。もちろん試験休みまで持ち越された方も少なくないでしょう。いずれにせよ取得後は、十年前ならミラ・アルトから乗り始めて、1500、1800ＣＣとクラスを上げていく者が多かったようです。しかし今では小林麻美のアルトさえ、構内であまり見なくなりました。若葉マークでいきなり原田知世のカローラⅡ・ターボだったりします。そういえばキャンパス・ファッションも、ジーンズが幅を効かせていた十年前と比べれば鮮やかになりました。学生の経済環境が様変りしたということでしょうか。

一方で十年間に学生定員が膨脹しました。つれて教官数も増え、総科の教官室は大抵が相部屋となっています。学生数と自動車購買率の伸長のため、入構車両数の増加にも著しいものがあります。なにより駐車場がなくなったという実感があります。車椅子の出し入れの都合上、僕としては、1.5台分の空間が必要です。一昨年に駐禁除外指定を受けるまでは「駐車違反」の紙を何度貼られたことか。今だに雨天での車椅子出し入れは苦行で、玄関の庇を借りて車を横付けさせてもらうのですが、心ない人々からクレイムが付いたりします。

車両入構規制は本年度から厳しくなりました。ぼくが自動車通学を始めた6年前にも「通学距離が4km以上」という条件はありました。その時は僕の場合は通学距離が4kmに満たないので、ある人の知恵によって、故郷の三次へ住民票を置き、そこから通っていることにして、入構許可が下りたということもかつてはありました。例外のない規則はないと言うように、通常の規則には「その他必要と認める者」への特別措置が記されてあるものです。にもかかわらず必要と認めるか否かの判定責任を負うより、事実に反する文書で辻褄を合せる方がやり易い、というのがビューロクラシーなのでしょう。それでも僕は広島大学の学生としてだけ生きているものではない訳で、故郷に住民票を置けば選挙権が行使できないなど、別種の問題が生じたのでした。もちろん現在では「必要と認める者」として、堂々自動車通学を楽しんでいます。

ところで近年はバイクも目立ちます。駐車スペースは見付け易いし、渋滞を抜ける身軽さは羨ましい。けれど駐車が雑だと通路を塞ぐので、車椅子が立往生させられることもあります。自動二輪対策として例の黄色い柵が随所に出現したものの、あれでは車椅子さえ通れないのです。交渉の結果、錠前で開閉できるよう柵を改造してもらいましたが、その手間たるや大変なものです。しかもどういう加減か、錠前が二度盗難にあい、その都度鍵が総替えになるなど、やっかい事を増やしただけという感じです。

車椅子での活動をより潤滑化するため、改造を希望する場所は、キャンパスに数多くあります。出願はしているものの、東広島への移転を見越して、旧キャンパスへの大がかりな手入れは困難なようです。たった5cmの段のスロープを付けることすら、すこぶる時間を要したりします。私有物ならまだしも、国有物であるだけ余計に、改造の申請はめんどうなようです。

それでも黄色い柵のように大袈裟なものが一瞬のうちに出来上がってしまうのは不思議です。何よりも僕はあの柵の色あいと肌触りが、学問的創造性と両立しえないものであることを感じざるをえません。あの黄色い柵の美意識が許されるならば、バイクも

解放されうるのではないかという気さえするのです。敢えて逆説を弄するなら、「バイクを規制するために黄色い柵を置く」ことと「黄色い柵を廃するためにバイクを解放する」こととの間に本質的違いを発見できないように思えるのです。

この十年間にキャンパスは確実に汚れてきました。それは抽象的な意味ではなく、外見上そうだということです。しかしまたそれは老化とは別次元の問題です。移転が唱えられた頃からでしょうか、その汚れに抗する努力を、誰もが放棄してしまったように見えます。なるほど少し悲観的過ぎるかもしれません。けれど大学が学問の場であることをやめ、単位取得の場となったのは、学生気質の中においてだけではなく、制度としてそれが強いられているとも言えるでしょう。例えば僕は数学の修士号を持っています。しかし、新入生として、微積分学の単位を取らなければなりません。より高度な専門授業で代替することはできません。それが制度というものなのです。キャンパスにおいて主体性を保つことが、環境との対峙であるのか、自己との対決であるのかは、決して二者択一ではないでしょう。

終わりに老婆心ながら、皆さん交通安全にはくれぐれも気を付けて下さい。ペーパードライバーの方がよく、無事故無違反で「優良ドライバー」の認定を受けているのを見ると、僕ら不良ドライバーには羨ましい限りですから。

新任紹介　その3

佐藤（さとう）　博明（ひろあき）

四国の屋島付近を旅行すると、みやげもの店でカンカン石という、鐘のような響のする真っ黒な石を売っている。これは屋島をはじめとする高松付近の台地を構成している1300万年ほど昔の溶岩の一部である。実はこのカンカン石（学名サヌカイト）と呼ばれる溶岩が私の学位論文の素材であった。卒論を始めて14年もかかってしまったのだから、赤面ものではあるが、その間何度かその謎解きに興奮する経験を持つことができた。この溶岩については、これ迄も何人かの研究者によって調べられ、それが特殊な鉱物組成を持つことが知られていたが、その特殊さの意味あいについては、いくつかの説があったものの、よく解っていなかった。いろいろ分析をおこなっていくうちに、このサヌカイトという溶岩は、日本列島のような島孤 ―プレートテクトニクス流に云えば沈み込み帯― に産する火山岩の中で最も極端な性質を持つことが明らかになってきた。単純化して云えば、プレートに伴って水を多量に含んだ堆積物がマントル中に沈み込み、そこに熱が供給されて水に富むマグマが発生した、と云うモデルが今のところ色々なデータを説明するのに一番無理がない。何故このような特殊な溶岩が、この時期、この場所でだけ生じたかという問題は、まだよく解っていないが、同じ時期に日本海の少なくとも一部が拡大して西南日本が回転・南下したことと関連した現象であるようだ。正直なところ、私はこのような全体的なモデルの構築は任意性がどうしても残るので好きではなく、もっと限定された問題、例えば、溶岩中のカンラン石という鉱物が、マグマが発生して後始めて晶出した結晶であるということの論証の方が決定的という点で面白く思っている。（解決可能な問題の設定を技術との兼ね合いで考える。）

これ迄のやり方が、分野全体として飽和してきたように思えることもあって、広島大学では少し手法を変えて、火山岩の結晶組織からその噴火時の熱史を読み取ることを、溶融実験と天然の溶岩の観察から進めることができればと考えている。さしあたり、まず1気圧下での相平衡実験で一応通用する結果をだすことが目標で、並行して西南日本の火山噴出物の結晶組織を記載していく予定である。

（環境科学コース　自然環境研究）

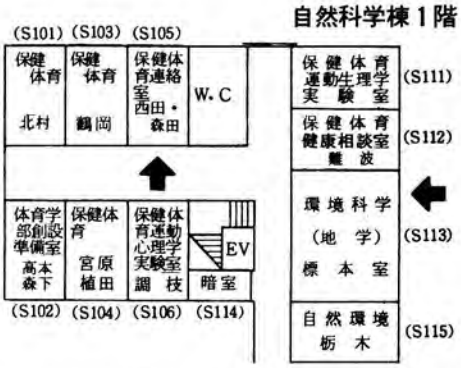
図書室ガイド

編　集　部

複雑に入り組んだ総合科学部校舎。一年生の中には教室を探しあぐねて迷った方もいるかも知れない。思わぬ所から伸びている廊下、得体の知れない幾つもの小部屋。各階に散在する図書室も学生にとってはよくわからないものの一つだ。扉の向こうに何があるのか、以下の文章で少しでもわかっていただければ幸いである。まずは自然科学棟から―。

自然科学棟一階に構えているのは体育連絡室。閲覧は事務の方にその旨告げてからということで、総科の図書室は大体この方式をとっている。ただ本を借りる場合やや特殊で、貸出冊数及び貸出日数はケース・バイ・ケース。事務の方とよく話し合いましょう。体育関係教官のバラエテイに富んだ所属コースを反映して、各官庁の白書まで蔵書にしている。

自然科学棟１階

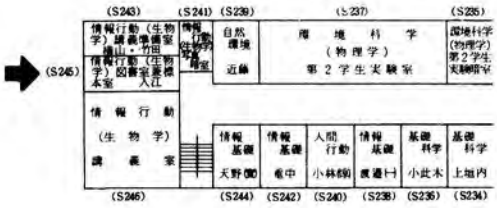


一年研究室の真上にあるのが生物図書室。自由に出入りして本の読める。数少ない図書室である。図書館の開架図書室のように、ぶらりと気軽に入って本が読めるのである。借り出したい時は、入口近くのカーテンウォールを開けて２人居られる事務の方に言いましょう。尚貸出冊数は２冊、日数は１週間。

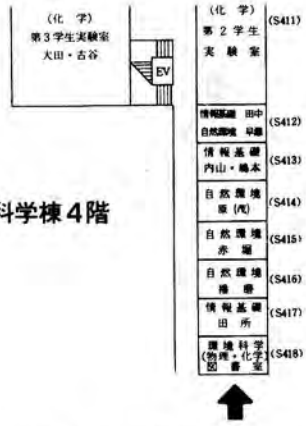
次は地学図書室。学生便覧の後ろの図面では２階だが、実はここは院生の研究室であった。実際は１階の地学標本室が図書室。ここに限らず、一般的に総科の図書室は学生の自由な出入りはきかない。ここでは学生証の提示が必要である。尚貸出冊数と日数は生物図書室と同じで２冊、１週間。

さて次は物理図書室。標札を頼りにＳ341と表示の出ている部屋のドアを開けると、何と授業の真最中。わずかの本を残して、４階の化学図書室に移動していたのだった。

自然科学棟２階

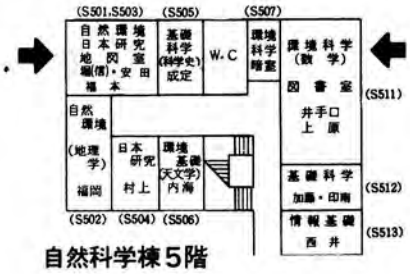


自然科学棟４階



化学図書室に行ってみると鍵がかかっている。ここは同じ階の端にある第３学生実験室の片隅にいらっしゃる事務の方に開けてもらわないと入れない。中の文献は物理・化学半々と言うことである。貸出冊数は２～３冊、期間は２週間以内。

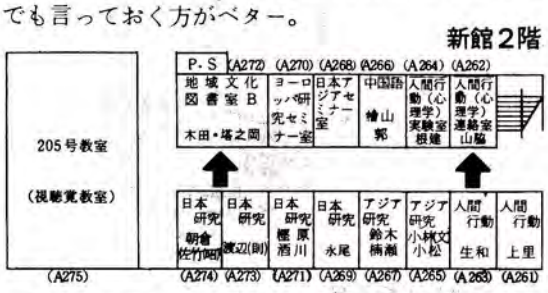
自然科学棟５階に控えるのが数学図書室。ここの本を借りる場合は教官の手をわずらわせることになる。貸出は原則として教官名で行われるからだ。勿論、学生は自由に出入り出来ない。貸出冊数２冊で期限２週間は他と余り変わらない。



自然科学棟５階

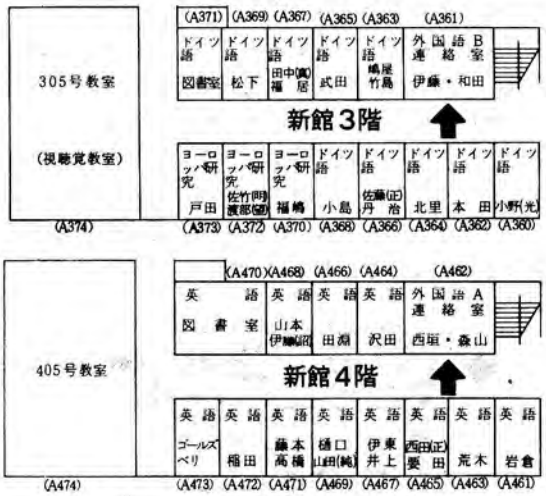
同じく5階には地理図書室が福岡先生の教官室と同居。ドアを開けると正面が書架になっており、右側のドアの向うに事務の方がいらっしゃる。ここは学生が自由に出入り出来る。貸出も貸出簿に記入すればOKで、冊数も期間も決まっていない。この他、地図等地理関係の教材も貸し出してもらえる。詳細は係の人と交渉を。

新館に目を移そう。まず2階に地域文化図書室B。日本及びアジア関係の書物の管理を担当している。ここは少し変わっていて、貸出冊数に制限がない。だからと言って山程借り出すのは問題だが…。期間は他と変わらず、2週間。入室する時に事務の方に一言、「『○○』という本を借りたいのですが。」とでも言っておく方がベター。



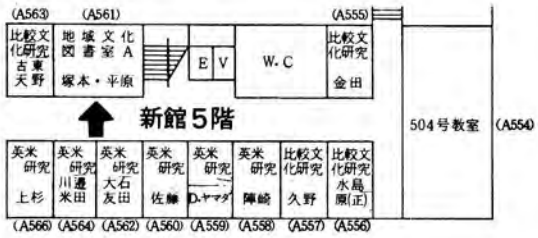
同じ階にあるのが心理学図書室。学生が自由に出入りし閲覧できる。数少ない図書室である。貸出冊数2冊、期間2週間。

3階は外国語B図書室。ドイツ語文献が担当である。ここは、部屋が2つある。まずは中央の階段の隣、A361の表示のある部屋へ行こう。ここに事務の方もいる。A371は普段鍵がかかっていて入れない。貸出冊数3冊、期間は2週間。

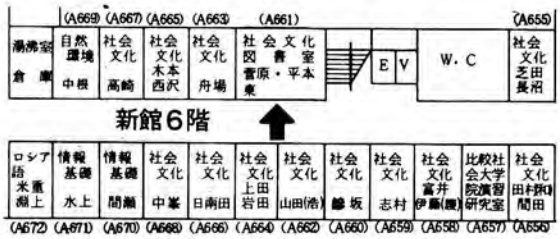


4階が外国語A図書室。英・仏・中・露語文献の担当となっているが、「英語以外の図書は各講座の教官にお願いして下さい。」とのことであった。(参考：仏語教官室は5階。中国語・ロシア語はそれぞれ2階と6階に教官室がある。)貸出冊数は2冊程度、期間は2週間。

5階、地域文化図書室Aは2階のBに対して欧米関係の図書を担当する。Bと同様貸出冊数に制限はなく、期間は2週間。



最後に6階の社会文化図書室。多くの図書室と同じく、ここも貸出冊数2冊、期間2週間。



各図書室を回って感じたのは学生に対する解放度の少なさである。勿論これには理由があって、各図書室とも教官方の連絡室及び休憩室として利用されているからだ。その為に長椅子やコピー機等が備えられ、しばしば会議も開かれる。図書は多くが教官室にあり、図書室そのものに図書をおくスペースはごく少ない。図書室よりも連絡室・事務室としての機能の方が主なのだ。何しろ図書室で事務の方に尋ねたら、同じ階の教官の動静がほぼ確実につかめているのだから。

最後に、図書室を利用する場合そこは教官と事務の方が主役だという事を忘れずに。そしてもう一つ。借りる本はあらかじめ図書館の目録で細かく調べておくべし。当然の事だが、貸出がスムーズに行く。

(文責　青山　幸樹)

シリーズ「数字」その7

9　6　8　1

編　集　部

目を覚ます。朝の8時20分、朝食を摂らずに行けばまだ1コマめに間に合う時間だ。カーテンを開くと、ガーン、なんと大雨。ちゃりんこで行けねェナア、いいや、どうせ○○先生だ、出席無いもんナア…。とNHKにチャンネルを合わせる。あーア、おりんちゃんは可愛かったナア…。こうして、彼（彼女）の出席率は3割台に突入するのであった。

広島大学総合科学部のみなさん、こんにちは。人恋しい秋、あなたはちゃんと学校に来ていますか？冒頭の数字は、我が学部に於ける昭和61年度前期の延べ授業数です。9681回、並べ換えれば1986になるという事実は、もちろん偶然以外の何物でもありません。この数字を多いと見るか、少ないと見るかは個人の判断に任せますが、あなたはこの9681回の授業のうち、一体何回の授業に関わっていましたか？何回の授業に、本来ならば関わっているはずでしょうか。広島大学の総合科学部に「所属」しているとはいえ、この授業数を見れば、自分の学んでいる、学ぶことのできる範囲は、なんと狭く、限られたものでしかないのだろうと思わずにはいられないのではないでしょうか。

ここに、もう一つ（正確には二つ）の興味深い数字があります。1つは436。もう1つは77。いずれも昭和61年度前期の、延べ休講回数と、それに伴う補講回数です。前者は「大喜び」の数字、後者は「ぬか喜び」の数字と呼ぶことができるでしょう。（もちろん、決してそういう受け止め方をなさらない方々も大勢いらっしゃいますが）掲示板に足を向ける学生達の大半は、この「大喜び」を求めていると言っても過言ではない。しかも、この数字はあくまで正式に掲示が出されたものでしかなく、実際はこの何割増になるかを把握することはできません。あなたも、教官のこういう台詞を耳にすることは一度や二度ではないはずです。「来週は休講にします、掲示はしませんが…」加えて、「自主」という名のつく休講（つまりサボリ）が当然のこととしてまかり通っていることもまた事実なのです。

学生の本分は勉強です。これは言うまでもないことであり、サークル活動であれ、アルバイトであれ、明るい男女交際であれ、学業を中心に回転していかなければなりません。しかし、しかし、現実の学生生活とはどのようなものであるのか。1コマめは全てブッちぎり、代返は当り前、代答もちらほら。9681回もの授業のあいだを、彼らはどう過ごしているのか。

アルバイトをしている。デートをしている。下宿で“いいとも”を観ている。喫茶部でダベッている。大学生活とは四年間の大きな夏休みであり、いかに上手くエスケープするか、要領良く単位だけはキープするかに全神経を集中するのだという話もごもっともです。今思えばほとんど無意味な、「受験勉強」という名のつめこみで、我々はもう限界だった。「やらされる」ことなんて、もうまっぴら！…でも、でも、故郷の両親の、血と汗と涙の結晶である12万6千円は、あなたが半年間、自由な時間を与えられるための「所属料」ではなく、「授業料」として払い込まれていることは心の片隅においといて欲しい。自分のための大学生活、四年間をどう使おうと自由だけれど、年に2回の試験には、想像力と数百円のコピー代で単位を買う、っていうんじゃあ少し寂しいのではないかな？9681回、後期にもたくさんたくさんの授業が行われています。さあ明日は1コマ目から出てみよう！

（注：授業数、休講数は～7/4、
補講数は～9/4の数字です）

（文責　鈴木　美緒）

シリーズ

街の総科 ―水―

中学校の頃、学校の情操教育の一貫として「菊の一人一鉢運動」なるものがあった。そこでは、一人一人が自分の菊に丹念に毎日水を与えなければ菊は枯れてしまうということを実感する運びとなっていた。しかし、植物→誰かが水を与えなければ枯れてしまう、という発想は、鉢や、やや規模の大きい花壇に限られ、その辺に「風景」として出現する植物などは、放置しておいても「どっこい生きている」、と我々は普通考える。

ところが、自分の周辺を見回したとき、目にする樹木は「どっこい生きている」わけではないということに気づく。知っている人が殆んどだと思うが、路側帯や公園にある植込みの下に緑色のホースが、よくひかれている。夏の暑い日などに、そこから放水しているのを目にした人は多い筈だ。

これは、「植樹散水栓」といい、中区内での60年度の年間使用水量は128.428㎥、費用にして2543万円。中区の年間総使用水量の0.421%とその量は全体とくらべるとまだ少ないかもしれない。

しかし、花壇の類いならまだしも、根が深くはる樹木になぜ散水栓が必要なのか。ある講義で聞いたところでは、「地下水の水位の低下によるもの」ということだった。太田川の治水施設が川から外側への水分の透過を著しくさえぎったのが、その大本の原因らしい。

そのように考えると、「開発とは水ものだな」とつい短絡的に、達観して言ってしまいそうになるが、本当に要求されるのは、開発がひき起こす広範囲に及ぶ影響を考慮した「真の開発」の創出である筈だ。我々を囲む植物・樹木が全て、水を与えねば枯れてしまう“菊の鉢”になってからではおそい。

（文責　吉田雄一郎）

行事予定表

（昭和61年11月～昭和62年３月）

11月

1日（土）～3日（月）　大学祭
5日（水）　創立記念日
9日（日）　秋期ソフトボール大会

12月

21日（日）　冬期休業開始（1月7日まで）

1月

8日（木）　授業開始
20日（火）　特別研究論文提出締切（地域）
24日（土）～25日（日）昭和62年度共通第1次学力試験
31日（土）　特別研究論文提出締切（社文・情報・環境）
　　修士論文提出締切（地域研究研究科・環境科学研究科）

2月

5日（木）　修士論文提出締切（生物圏科学研究科）
10日（火）　転学部・転学科願書受付締切
16日（月）　志望コース届提出締切

3月

1日（日）　学年末休業開始
5日（木）　昭和62年度入学試験
24日（火）　卒業証書授与式・学位記授与式

編集後記

今期『メタセコイア』の廃刊が決まったので、この『飛翔』が総合科学部唯一の広報誌となった。そこで、多少新鮮な気持ちで編集に当った所が見られるができばえはどうであろうか。

（広報委員　富井　利安）

ほとんどお役にたてず、申し訳ないと思っています。今回も学生さん委員の意欲を感じました。面白くて役にたつ『飛翔』の発展を祈ります。

（広報委員　荒井　貞光）

昨年「メタセコイア」を担当してきた関係で、愛着を感じ、その廃刊を惜しむ一人ですが、『飛翔』が総合科学部構成員全体に興味をもって頂ける内容に刷新されつつあることを喜んで居ります。

（広報委員　福岡　義隆）

最終段階で少しおつき合いさせていただきました。自らの「講義」を顧みて忸怩たるものがあります。

（広報委員　成定　　薫）

今回より学生編集委員のメンバーも少し交替（若返った？）しましたが、本号の出来映えを見るにつけ伝統の継承というものを改めて感じました。

（厚生補導係　宮城　勝彦）

いつの間にやら「飛翔」に足を踏み入れてしまった私。運命だったのかしら？こんな私と、誰かお友達になって！　（内藤千恵美）

白熱の企画会議から五ヶ月。そして今、締切りに追われる日々が続く。ジタバタと駆けずり回ってようやく出来た。と思ったら次の号が…。もはや言葉もない。　（青山　幸樹）

私の原稿はできあがりました。バンザイ!!後期は“幸樹”くんよろしく。（すいません）

（小笠原弘明）

誰かＴＥＬ代払って。　（鈴木　美緒）

私の『締切』は、８月の日差しに灼け、９月の残暑に溶けてしまった。今はただねっとりとした金木犀の香りの中、頭が痛くなる迄日向ぼっこしたい。「忙しい」と言わない女を目指すぞっ!!

（藤本　貴子）

ＵＷＦは二度死んだ。しかし、理想を求めて彼らは何度でも蘇る。既成の“体制”に対する妥協なき闘争は今、プロレス界でしかみられない。若者よ、アキラを見よ。などと下らんことを言って仕事をしない変醜長とは、ワタシのことよ♡（吉田雄一郎）

血と汗と涙と…。俺の秋休みを返せっ！

（田中　　誠）

次号予告

総科が変わる。創立以来始めての大改革が行われ、それが来年度生から適用される。変革は、主に理系を中心に、この学部の旗印である「学際的研究」を、より実りのあるものにするために、全コースの再編成が予定されている。

君はこのことを知っていたか？大学の主役は学生である。したがって、大学自体のありようも学生が作りあげる部分がなくてはならない筈だ。つまり、制度に対して積極的なまなざしを送らなければ、それは、大学における主役としての地位を放棄することになる。

そういった認識から、次号はこの一大改革を克明に記録した「総科新制度」を特集してお送りする予定です。ご期待下さい。